

実習授業を見学して

清水郷美（お茶の水女子大学）

「日韓大学生国際交流セミナー」にティーチング・アシスタントとして参加する機会に恵まれた。日本語教育実習の日程に合わせて訪韓し、参加学生5名の教壇実習を見学した。また、日韓学生フォーラムにも参加した。

教壇実習見学では、多少の個人差はあったものの、5名とも総じて堂々とした振る舞いを見せていた。念入りの準備とリハーサルの上に臨んでいることが如実に表れていたと言える。また、実習後の振り返りが良かった。学生一人一人が気負うことも卑下することもなく、他者による評価を受け止めるとともに、自己のパフォーマンスを客観的に評価しようとしていた。「日韓大学生国際交流セミナー」を通じて、自己を相対的に見る目を既に獲得しているように思われた。

日韓学生フォーラムでは、授業で学んだことを土台に日韓の共生に向け今後何ができるかについて、韓国と日本の学生が共に語り合う活動が行われた。全体として和やかな雰囲気話し合いが進んだが、その過程で印象的だったのは、日本人学生のみならず釜山外国語大学の学生も、日韓の対話の重要性および複文化的視点の必要性を捉え、この類の授業の意義及び必要性を説いていたことだ。しかも、彼らはそれを日本語で語っていたのである。日韓学生フォーラムが着実にその成果を残していることを実感できた瞬間であった。

「複言語・複文化主義」にせよ、Can-doにせよ、これらの用語は日本語教育において既にある程度定着している。しかし、用語や理念として浸透していることは、必ずしも教育実践に活かされていることを意味しない。実際、何をどのように実践すれば、Can-doの考え方を最もよく体現した指導となり得るのかについて、日本語教師間で何らかの共通認識や合意が確立されているわけではない。まして「複言語・複文化主義」となれば、なおさらである。個人のなかに「複言語・複文化」的な視点やアイデンティティを育むこととはどのようなことで、それはいかなる方法で生じ得るものなのかについて、日本語教育の現場ではあまり議論されてきていないし、数多くの実践例があるわけではない。

そのような現状に鑑みれば、日韓学生フォーラムを含む「日韓大学生国際交流セミナー」は、「複言語・複文化主義」的な日本語教育実践モデルとして重要な価値を持っている。そのようなセミナーに参加できたことは貴重な経験である。私も含め、今回の参加者5名はその経験を今後も伝え広めていく一端を担っている。

日韓がともに生きる起点となれ

森山新（お茶の水女子大学）

「日韓大学生国際交流セミナー」は、今年で17回目を数え、戦後ヨーロッパを戦争から共生へと導いた「複言語・複文化主義」の考え方にに基づき、まずは韓国の言語と文化を学び、その上で日本の言語と文化を教えながら、東アジア人としての国際的な人材を育成するプログラムとして2016年より新たな出発をなした。

コロナ禍の影響でここ数回は残念ながらオンラインでの開催となり、実渡航での実施は久しぶりのことであった。釜山外大の各指導教員のあつい信頼と細かな手ほどきのもとに、教案の作成から模擬授業、事後の振り返りと休む間もなく実習に励む学生の姿は、それを見守る我々に大きな感動を与えてくれた。だれ一人として、教壇に立ち、日本語を教えた経験のない学生たちは、連日、夜遅くまで準備を行い、各自2回、合計4時間の授業の全てを教員に代わって担当した。皆、綿密な準備を背景に、ある時は大胆に、ある時は堂々と、そして明るく、教壇実習をこなしていた。

今年度はシティズンシップ教育としての側面を強化するため、9月15日に「第4回日韓学生フォーラム」を開催し、日韓が、そして東アジアがともに生きるために、自身は何ができるのか、対話と討論の場を持つことができた。今回参加した学生は皆、今年度前期に「言語と文化」の授業を通し、釜山外大の学生たちと、自身のアイデンティティや相手のイメージ形成といった内面を振り返ると同時に、現在も日韓両国間に残るセンシティブな諸問題について話し合った学生たちであった。オンラインでの交流に続いて、こうして対面でも釜山外大で日本語を学ぶ学生と交流を行うことで、彼らが今後両国の架け橋として大きく成長してくれることと信じている。

釜山外大とは2016年に国際学術交流協定が締結されたが、交流は2007年より始まっていた。2007年から毎学期TV会議システムを活用した国際合同遠隔授業を行い、両国に横たわる様々な問題、ステレオタイプ、コンフリクトなどを日常的に取り扱ってきたのをはじめ、2011年度からは、東日本大震災に端を発し、釜山外大からも学生を招き、世界8か国の学生が本学に一堂に会し、毎年「国際学生フォーラム」を開催、世界の災害に若者は何ができるかを話し合った。2015年には、戦後70年、日韓国交回復50周年を記念し、本学の学生35名を連れて釜山外大を始め韓国の3つの大学を訪問し、両国の過去、互いの良さ、そしてともに歩む未来について話し合った。その後もTV会議システムを用いた合同授業で、日韓の間に立ちほだかる国家のコンフリクトや個人のコンフリクトについて考えたり、日韓の歴史問題を扱い、共通教科書の作成を考えたり、自身のアイデンティティ形成や他者イメージ形成のプロセスを振り返り、日韓の個人的、国家的対立の原因が、社会化のプロセスの中で教育や報道などの影響を受けながら形成されてきたことなどを学んだ。そうした両大学による一連の歩みにより、日韓、さらには東アジアが、何とかこの困難を打開して欲しいと願ってやまない。

両国の学生たちは、ともに生きるための「複言語・複文化主義」に促され、ナショナリズムを克服し、積極的に交流を展開し、今まで以上に深い絆に結ばれた。それぞれのアイデンティティは、国家の枠を超え、より国際的なものへと成長したであろう。釜山外大の教員、スタッフの方々も、そのように大きく変わりゆく本学の学生たちを見ながら、苦勞の多い本プログラムの開催に大きな手応えを感じていた。

複言語・複文化主義は、他の言語・文化を学ぶことを通じ、母語と母文化を中心に今ま

で当然視していた価値観を相対化し、他の文化に関心と敬意を持つことで、ナショナリズムを克服し、ヨーロッパが、そしてアジアがともに生きるためのインターナショナルなアイデンティティ構築に寄与するとされている。もちろん、知識として、またスキルとして他の言語・文化を学ぶだけで、このような変化を引き起こすことは難しいであろう。しかし、それを積極的に促すために、フォーラムなどの交流の場を提供し、お互いに対する愛情と尊敬の気持ちを育み、正しい知識とナショナリズムを超えた視点に基づいて相互理解を深め、交流を行っていけば、対立を和解に、そして共生へと導く変化は着実に起こりうるということを今回のプログラムを通じて再度実感することとなった。

釜山の地はこれまで、日本と韓国の間であって、いくつもの悲しみといくつもの喜びを経験してきた。豊臣秀吉の時代にはまずもって日本の被害に合い、その後徳川幕府の関係修復により、朝鮮通信使派遣の起点となった。しかし植民地時代には、歌「釜山港に帰れ」にあるように、多くの民が日本へと連行される悲劇の舞台ともなった。そうした悲しみを乗り越えながら、釜山は今、日本と韓国、そして東アジアをつなぐ基点として生まれ変わろうとしている。釜山外大は、ヨーロッパが欧州共同体建設のために策定した「ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR)」の指導法をいち早く採用し、日本語教育を行っている。私が釜山外大に注目し、協定締結にこぎつけ、交流を開始した理由がそこにある。

今回築いた重要な一歩を、今後さらに発展させ、近い将来、東アジアがともに生きる未来をこの学生たちの手で作りあげられることを祈り、期待してならない。

今回、このように貴重な進歩を遂げることができた背景には、様々な形でプログラムを提供して下さった、釜山外大の日本語創意融合学部の諸先生、国際交流チームのスタッフのご尽力があつてのことである。この場を借りて心から感謝したい。また、本実習に参加した学生たちが、今回の様々な学びをもとに、今後人として、または日本語教師として、日韓、そして東アジアがともに生きる上で重要な役割を担うものとなってもらえればと願ってやまない。